

## 2015年度助成分

## ■研究課題名

## グローバル化する現代世界での貧困・暴力・リスク

研究代表者：

宮代康丈（慶應義塾大学総合政策学部・准教授）

招聘研究者：

アラン・ルノー（パリ・ソルボンヌ大学（パリ第4）・教授）

招聘期間： 2015年11月26日～2015年12月1日

## 【研究の概要】

本研究では、パリ・ソルボンヌ大学教授であり、応用政治哲学国際センター長も務めるアラン・ルノー氏を招聘し、2015年11月27日に慶應義塾大学日吉キャンパスで「極限状況を考える」と題する講演会を、同月29日に京都大学吉田キャンパスで「現代におけるジェノサイドと大量殺戮の問題」という講演会を開催した。また、12月1日に慶應義塾大学三田キャンパスで、グローバル化やテロリズムといった昨今の世界状況を踏まえつつ、大学が果たすべき役割について『三田評論』編集部企画のインタビューも実施した。なお、今回の招聘では、上記センターの中核メンバーであるジョフロワ・ロヴォ氏がルノー教授と共に来日したため、講演とインタビューに同席してもらい、交流の輪をいっそう広げることができた。

慶應義塾大学でのルノー教授の講演は、飢餓・ジェノサイド・気候変動などの極度の貧困・暴力・リスクといった現実の状況を前にした時に、これまで抽象的な原理や概念を主に扱ってきた哲学者にはどのような責務があるのかということを問うものであった。グローバルなレベルで生じている極限状況に哲学者が立ち向かうためには、従来の原理的アプローチから離れ、優先順位や緊急性の問題に着目することの重要性をルノー教授は指摘した。京都大学での講演では、ジェノサイドの問題が取り上げられた。この問題については、社会科学の分野で既に多くの研究の蓄積があることを指摘しつつも、ルノー教授は哲学の観点から新たなアプローチを試みた。ジェノサイドでは、人種や民族文化、気候変動といった複数の問題領域が交差しており、その特徴は、「われわれ」として自己認識する集団が「彼（女）ら」として区別される別の集団に対して不当な不平等拡大を課す点にあるという考えを示した。いずれの会場でも、講演者二人と聴衆との間で質疑応答が行われた。講演の実施が11月13日に起きたパリでの2回目のテロ後であったこともあり、極限という講演の中心テーマと重なり合って、予定の時間では足りないほど活発なものとなった。

なお、東京でも京都でも、ルノー教授の講演原稿の日本語訳を会場で配布した。この翻訳はもちろんのこと、『三田評論』でのインタビューも何らかの形で出版ないし公開を予定している。なお、フランス語で行われたインタビューは応用政治哲学国際センターのウェブサイトですでに聴取することができる（[http://cippa.paris-sorbonne.fr/?page\\_id=2590](http://cippa.paris-sorbonne.fr/?page_id=2590) [2016年3月29日最終閲覧]）。